

猿田彦神を斎き祀る龍天大明神/阿射加神社

● 昨年のこと。佐賀市大和町に仕事で呼ばれ、そこで三重県松坂市の方々と出会った。妙に縁を感じ、久しぶりに「なにかあるかも」と、パソコンにストックしてある三重県の神社ファイルを開いてみた。すると、以前チェックしていた松阪市の「阿射加（あざか）神社」、通称「龍天大明神」を見つけ、思わず驚きの声を上げてしまった。

実は、私の子供の頃のあだ名は「竜天太陽」。だいぶ前に「竜天神社」ってありそうだなと思い、検索してこの阿射加神社が見つかり、いつか詳しく調べてみようと思ったまま、伊勢志摩の影になり、すっかり忘れてしまっていたのだ。

この阿射加神社は猿田彦神を斎き祀る神社という。長年の歴史調査により、饒速日命と同様に猿田彦神も天照大神以前の太陽神であると私も考えついている。ただ、なぜか1kmも離れていない大阿坂町と小阿坂町に二つあり、どちらも龍天大明神と呼ばれている。どちらも裏山にあたる阿坂山上にあったものを遷座したと伝えているが、理由は諸説あるようだ。

その後、私は松阪市でも仕事をいただき、直接阿射加神社を訪ね、阿坂山に登ることができた。驚いたのは、阿坂山は頂上のピークが二つあったこと。

とても重要なしくみが予想できたが、以前使っていた正確で使いやすいコンパス機能付き地図ソフトが見当たらず保留してしまっていた。そして近頃、心が騒ぐので、なんとかまとめなければと思い立ち、地図を探したところ、1mまで測れる優れものの「同心円-MULTISOUP」というサイトを見つけた。おかげで、手間はかかるものの以前に使用していたサイトよりも正確に調べることができたので、ここにまとめてみようと思う。

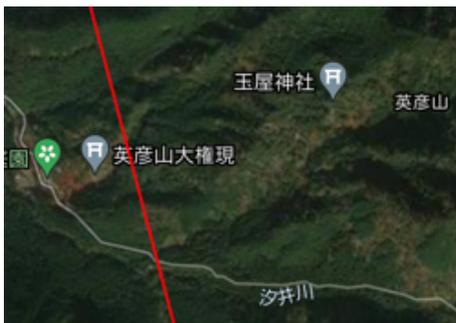
まずは大阿坂町の阿射加神社から、いつものように地図、ネットで検索した資料、そして考察を備考として書いてみようと思う。



第1章 大阿坂町の阿射加神社



■ 英彦山大権現（塞の神岩座）528.365km - 阿射加神社（大阿坂町） - 大沼浮島（出島）528.365km



阿射加神社

概要

三重県松阪市にある神社。同名神社として2社があり、いずれも伊勢国壹志郡の式内社（名神大社）論社。両社は松阪の平野を見渡す阿坂山東麓に東面して建つなど立地条件を同じくし、ともに近世まで「龍天大神」と俗称されるなど共通した信仰を有するものであり、また両社の距離も1kmに満たない。後述するように、式内「阿射加神社」は当初阿坂山上に鎮座していたとされ、阿坂山上から山麓への遷座を小阿坂とするか大阿坂とするかによって説が分かれるのであるが、他に、両社は3座の中の2座で別に1座があるとする説もあり、更に、当地一帯は伊勢神宮の外宮の御厨（阿射賀御厨）とされていたが、延元4年（1339年）の神宮の神領目録である『給人引付并神領目録』には、これが「大阿射賀御厨」・「小阿射賀御厨」と2分されていることから、両社はその分割に際してそれぞれの御厨に鎮守神として勧請されたものと見ることもできる。

祭神

『皇太神宮儀式帳』に、倭姫命が藤方片樋宮において天照大神を奉斎していた時に、垂仁天皇の使者である阿倍大稻彦命（あへのおおしねひこのみこと）が阿佐鹿悪神（あさかのあらぶるかみ）を平定したとあり、『倭姫命世記』には、「阿佐加之弥子（阿坂の峰）」に伊豆速布留神（いつはやふるのかみ）がいて通行の邪魔をするので、その心を和ませるために山上に神社を造営し、外宮祀官度会氏の祖である大若子命（おおわくごのみこと）に祈らせた、とあり、同書所引の一書にも、「阿佐賀山」に荒神（あらぶるかみ）がいて、倭姫命の「五十鈴川上之宮」（現内宮）への巡行を阻むので、かつて阿坂国（当地一帯の古称）を平定した天日別命（あめのひわけのみこと）の子孫である大若子命に、その荒悪神（あらぶるかみ）を祀らせるとともに神社を建立した、とあり、この「悪神」や「伊豆速布留神」や「荒神（荒悪神）」が当神社の祭神で、本来は当地一帯を領有する神であったが、後に水田耕作における水神信仰と結びついて、上述した「龍天大神」の俗称を得たものと見られている。一方、祭神が3座とされていることについては、出口延経が、当地は『古事記』に猿田彦神が溺れたと伝える伊勢国阿邪訶の地であり、その時に化生した猿田彦神の3つの御魂である底度久御魂（そこどくみたま）・都夫多都御魂（つぶたつみたま）・阿和佐久御魂（あわさくみたま）が当社祭神の3座であると唱え（『神名帳考証』）、本居宣長もこの説を襲って（『古事記伝』）以来、上述の「荒振る神」の様態と、「記紀」の天孫降臨段に記す猿田彦神のそれが重なり合うことから、当社祭神3座を猿田彦神の3つの御魂と見るのが有力な説となっており、現在の両阿射加神社も、祭神として猿田彦神・伊豆速布留神を掲げている。なお、古代の海士はワタツミ三神や住吉三神・宗像三女神に認められるように、「3」を聖数視しているので、当社祭神が猿田彦神の3つの御魂であるならば、本来当地の海士がその3つの御魂を奉斎していて、そこから『古事記』の伝承が生まれたと見ることもできる。wikipediaより

大阿坂町の阿射加神社

延喜式 阿射加神社由緒

神明造 村社 阿射加神社 従三位

主祭神 猿田毘古大神

松阪市大阿坂町

境内 四町三反八畝十五歩

山岳 四町一反六畝十五歩

参道 二五〇メートル

由緒

第十一代垂仁天皇十八年夏四月、皇女倭姫命が天照大神の神霊を祀る地を探し求める途中阿佐賀の地を訪れ荒ぶる神伊豆速布留大神を大若子命をもちて鎮めさせ阿佐賀山の嶺柝形山に社殿を造り種々の幣物をもたらし祭ったのがこの神社と言われる（神道書、倭姫世記）阿射加神社は平安朝時代から社格の上からも朝廷から破格の崇敬を受け、八三五（承和二）年従五位下、八五〇（嘉祥三）年従五位上、八五五（斉衡二）年従四位下、八五八（貞観元）年従四位上、八六六（貞観八）年従三位を伊勢国阿邪訶神に授け奉ると昇叙の記が見られ第六十代醍醐天皇延長五（八九〇）年延喜式内大社の格に編入され延



喜式神 名帳に伊勢国阿射加神社三座並名神大なり二八五座の内となる猿田毘古神座阿耶訶と古事記にも見られる古社である。

伊勢国司北畠満雅應永年中阿坂山に砦を築く時に社地を山より今の地に遷したと記されている。

主祭神 **猿田毘古大神**（伊豆速布留大神、**龍天大明神**）

底度久御魂

都夫多都御魂

阿和佐久御魂 一殿三座並名神大

猿田毘古大神は天孫降臨の時天ノ八衢に出られ、上は高天原を照らし下は葦原の中国を光し迎になったとある。鼻の長さ七寸、背の丈七尺目の大きさ八寸で鍾のごとくまなこの色赤酸漿である。

神位 第五代仁明天皇 承和二年十二月（八三五年）従五位下

第五代文徳天皇 嘉祥三年十月（八五〇年）従五位上

第五代文徳天皇 斉衡二年四月（八五五年）従四位下

第五代清和天皇 貞観元年正月（八五八年）従四位上

第五代清和天皇 貞観八年十一月（八六六年）従三位

第六〇代醍醐天皇延長五年（八九〇年）式内大神社に編入され延喜 式神名帳に伊勢国阿耶賀神社三座並名神大とあり、臨時祭名 神祭二八五座の内となる。

昇叙の記が日本三代実録などの国史に見られる。

（境内由緒板より）

祭神

御巫清直の『伊勢式内神社撿録』には、「一殿三扉ニテ（中略）阿和佐久御魂云々ノ三神名ヲ書ス（中略）**里俗称スル所ハ龍天大明神ノ一座ノミナリ**。其北ニ在ル小祠ヲ神明トイヒ、南ニ在ル小祠ヲ熊野社ト唱フルコト小阿坂村ト一途ナリ」と、当時の実情を記している。

歴史

安岡親毅の『勢陽五鈴遺響』には、応永以後に阿坂山頂から遷座したと記し、社伝によれば、織田信長が、城主として阿坂山山頂の阿坂城を守っていた北畠家の重臣、大宮入道含忍斎を攻略する際の**兵火に罹り、社殿と古記録の全てを焼失し、北畠氏滅亡の後に再建された**とはいえ管理する者もいなかったが、元禄3年（1690年）に奥村要人という社人が現れたと伝える。

（Wikipediaより）

三重県松阪市大阿坂町670

大沼浮島と浮嶋稻荷神社

湖畔にある大沼浮嶋稻荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数32あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳9年（681）役の小角（役の証覚・役の行者）が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に大沼宮を建立し、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行なわれた。建久4年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、



最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。役の小角は梵字が書かれた板碑が流れてきたのを見つけたのだから、すでに大沼は異教徒の浮島信仰の地だったはず。稲荷神社の神池とされるが、「大富沼」が大沼なら元々は出雲系「富一族」の祀る沼だったのだろう。大朝日岳にも大富観音が祀られていた。元々弁才天や龍神の神池に稲荷神が祀られたのだと考えられる。あるいは、系図には730年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるが、その時に浮島宮は稲荷社にすり替えられたのかもしれない。いずれにせよ、古いしくみはほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島」(写真上)が起点となっている。弁才天(推定/瀬織津姫)を祭神とする大沼浮島宮はここにあったはず。もしくはここを遥拝する社殿が湖畔にあったと考えられる。全国に散らばる浮島神社の総本宮がここにあったのではないかと。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫が祀られているのも、その分社だったのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になるにちがいない。参考/朝日町史上巻、あさひまちエコミュージアムサイト他



英彦山と英彦山大権現社(滝の坊跡)

英彦山は古代より神体山として信仰されていたとみられる。当社の開基については次のような伝承がある。継体天皇25年(531年)、北魏の僧・善正(ぜんしょう)が英彦山山中で修行中に日田の獵師の藤原(藤山)恒雄(こうゆう、のちの忍辱(にんにく))に会い、殺生の罪を説いた。しかしそれでも恒雄は獵を続け、1頭の白鹿を射た。その時、3羽の鷹が出現して白鹿に檜の葉に浸した水を与えると、白鹿は生き返った。それを見た恒雄は、この白鹿は神の化身なのだと悟り、善正の弟子となって当社を建立したという。

また別の伝承では祭神忍骨命の降臨した地とされて山上

に一祠が建てられたのが起源とも云う。清和天皇代の貞観7年(865年)に従四位上を授けられたとあり、延喜式神名帳にも忍骨命神社として名を残す。

いずれも伝承で実際の歴史は、11世紀初頭に増慶によって中興されるまでについては10世紀の「太宰管内志」等わずかに残るのみである。しかし早くから神仏習合し彦山「権現」の名を用いていた。12世紀には、後白河法皇撰の梁塵秘抄では「筑紫の靈検所は大四王寺、清水、武蔵清滝 豊前国の企救の御堂 竈門の本山彦の山」と詠まれており靈山としての英彦山はこの時期には中央に知られていたことが分かる。

「英彦山」という山名は、社伝では天照大神の御子(日の御子)である天忍穗耳尊を祀ることから「日子山」と呼ばれるようになったとしている。弘仁10年(819年)、僧法蓮が、山中で飛来した鷹の落とされた羽に「日子を彦と改めよ」と記されているのを見て嵯峨天皇に上申し詔によって「日子山」を「彦山」に改めたとされる。(wikipediaより抜粋)

次いで、霊元法皇、享保14年(1729年)には、院宣により「英」の1字を賜り「英彦山(ひこさん)」と改称され現在に至っています。(英彦山神宮サイトより)



英彦山の古い記録「彦山流記」では彦山の始まりは、「玉屋窟」(玉屋神社/祭神 猿田彦神)であるといわれています。彦山の開祖はこの窟で修行した、恒雄という人だったのです。恒雄は、この窟でながいあいだ一心不乱に修行を積んで、如意の宝珠(世の中の人々を救うためにたいへん役立つ不思議な力を持つ珠)を授かりました。その珠は窟の奥から小さな倶梨伽羅(竜)が口にくわえて細い水の流れにのって現れたのです。珠が出現したことから、それまで般若窟と呼んでいましたがそれを改めて、玉屋窟と呼ばれるようになりました。「添田町公式サイト」より



英彦山は、平安時代より神仏習合で山腹には天台宗靈仙寺、山上に英彦山大権現を祀った勅願所であり、寺社領は方七里、十万檀那を朝廷より賜り、靈仙寺は比叡山延暦寺に準じる格式を持ちました。

中世は山中に49窟、3800坊があったと称され、大和国の大峯山、出羽国の羽黒山とともに日本三大修験道場の一つでありました。

近世になって天正9年(1581年)、彦山と秋月藩との盟友関係を憤った豊後の大友軍は雲霞の如く雪崩をうって彦山に侵入、重要建築物を占有し、火を放ちました。天正14年まで前後7年間の戦闘があり、これは織田信長の比叡山焼き討ちに匹敵する法難でありました。

その後、豊臣秀吉の九州征伐軍に反抗したため、彦山の寺社領は没収され、重ね重ねの法難にありましたが、彦山大権現の信仰は益々隆盛で、山伏姿の修験者は九州各藩に檀家を持ち、加持祈祷をしてまわり、権現信仰を広げていました。なかでも、元和2年(1616)小倉藩主、細川忠興氏は山伏たちの集会する講堂として、現在の奉幣殿を再建しました。肥前佐賀藩主の鍋島氏も信仰厚く、寛永14年(1637)銅の鳥居を彦山大権現に寄進し、また享保14年(1729)、靈元法皇から、靈験灼かな山として、彦山の上に英の字を附し英彦山とすべしと勅願を賜りました。

明治元年(1868)、神仏分離令が発布され、神仏習合の英彦山大権現(阿弥陀如来=天忍穗耳命)は廃止され、その社は英彦山神宮として、神(天忍穗耳尊)を祀ることになり、修験者の多くは山を降りました。

その後、百十余年、英彦山大権現の尊称はまさに歴史の彼方に消え去らんとしていました。この由緒ある法灯を英彦山大権現の御告げを戴き、昭和54年、権現信仰の発祥の地である玉屋溪谷の滝の坊跡にお祀りさせていただくことになりました。(英彦山大権現ホームページより抜粋)
福岡県田川郡添田町大字英彦山字榎ヶ谷

●山頂の阿射加(あざか)神社の創建は垂仁天皇十八年というので、2030年前のBC12年ということになる。松坂は猿田彦神が漁をしていた時、比良夫貝(ひらふがい)に手を挟まれ溺れて命を落とした阿邪訶(あざか)の海の地である。伊勢を統治していたのもこの地だと推測されている。おそらく、神武東征の時に阿倍大稻彦命に海で殺されたのではないだろうか。

山頂の阿射加神社を白米城の石碑にコンパスの針を置き、大沼浮島の聖地の出島の円周ラインを見たがどこもぶつかってはこなかったので、大阿坂町の阿射加神社本殿にコンパスソフトの針を置いてみた。

すると山岳修験で有名な英彦山に円周ラインがぶつかっているのがわかり地図をさらにUP。残念ながら英彦山頂上や英彦神宮よりも西に離れた英彦山大権現の近くに円周ラインは通っていた。権現社にもぶつかっていないが、すぐ近くを通っていた。英彦山大権現を調べてみると昭和54年に再興されたものと知りさらに落胆したが、よく読んでみると、そのあたりは英彦山信仰の発祥地であり「滝の坊跡」なことが分かった。そして、近くには開祖の恒雄が修行した玉屋窟の玉屋神社があり猿田彦神が祀られている。その事実にときめいた。

一ヶ月後、もう一度佐賀県に呼ばれた時に、足を伸ばして英彦山大権現や玉屋神社を訪ねてみた。さっそく英彦山大権現(旧滝の坊跡)近くの円周ラインのあたりに祀られている神仏はないかと探すと、

そこには見事に大きな岩座があり「塞の神」の大きな男根が祀られていた。塞の神は猿田彦神である。岩座自体は瀬織津姫（女神）だから、猿田彦神（男神）の象徴として男根を祀って合体神を表している。滝の坊の「滝」も瀬織津姫を表しているのかもしれない。

英彦山権現社よりも神秘的な空気を感じた。写真を撮ってみると、岩座に無数の丸い光のオーブが重なるように写りこんでいた。（写真参照）私はここが滝の坊の聖地であることを確信した。

大阿坂町の阿射加神社の猿田彦神は、瀬織津姫の大沼浮嶋と、瀬織津姫の英彦山滝の坊岩座の自然波動に守られているように感じた。出雲系のしくみなのだろう。

では、どうして山頂でなく里の宮なのか。おそらく、英彦山大権現岩座と大沼浮島の両極から瀬織津姫の神気を引き寄せ、山頂の猿田彦神に合体させる神事を行うための社殿の持たない祭祀所だったのでないか。後にそこに社殿を建てたのではないだろうか。



さて、地図を見ていたら、仕事でお世話になった佐賀市大和町がラインの延長線にあるような気がして、ためしに伸ばしてみた。すると…



■ 《レイライン》 與止日女神社 - 英彦山神宮上宮 - 阿射加神社（大阿坂町）



與止日女神社

「淀姫神社」とも書き、別称として「河上神社」、通称として「淀姫さん」とも呼ばれている。

祭神/與止日女命（よどひめのみこと）神功皇后の妹という。また一説に、豊玉姫であるとも伝える。

『肥前国風土記』逸文（神名帳頭注）には、「與止姫神」のまたの名を「豊姫」「淀姫」というとある。また、同書佐嘉郡条には「世田姫」の説話が載り、同一神と見られている。佐賀県を中心とする北九州地方には、與止日女神（淀姫神）を祀る神社が多数あり、そのうち当社を含めた6社が嘉瀬川流域にある。

『肥前国風土記』逸文（神名帳頭注）によれば、欽明天皇25年（564年?）11月1日に與止姫の神が鎮座したという。同書に収録された川にまつわる説話から、水神信仰として成立したものと見られている。

延長5年（927年）の『延喜式』神名帳では肥前国佐嘉郡に「與止日女神社」と記載され、式内社に列した。弘長元年（1260年）に最高位の正一位の神階を授けられた。

平安時代には、肥前国では田島坐神社（現 田島神社）が安全航海の神として崇敬され、神階も当社より上で『神名帳』では肥前国唯一の大社に列していた。しかしながら遣唐使の廃止もあってその地位は低下し、代わって中世以降は国衙に近い当社の地位が高まり、肥前国一宮として崇敬されたという。ただし、後述のように千栗八幡宮も一宮を称している。

弘安の役（1281年）では與止日女大神の神霊が敵の船を摧いたと伝えられる。慶長7年（1602年）に後陽成天皇が「大日本国鎮西肥前州大一之鎮守宗廟河上山正一位淀姫大明神一宮」と書いた勅額を下した。すなわち当社が肥前国一宮であるとするものであるが、千栗八幡宮も肥前国一宮とされていたことから、両社の間で60年にわたる紛争が起こった。

明治4年（1871年）には近代社格制度において県社に列した。国幣社への昇格も進められていたが、第二次世界大戦の終結により実現しなかった。



嘉應二年（一一七〇）の記録には、境内に本殿が記されていない。本来は、川そのもの、あるいは、淵を拝する、自然崇拝の神社だったという説がある。佐賀県佐賀市大和町大字川上 1

備考

塞の神の岩座からラインはずれてしまったが、英彦山神社上宮を通って佐賀に向かうと大和町にある式内社の與止日女神社にピンポイントでぶつかった。また鳥肌ものである。なにしろ、私が仕事で行った場所はすぐ近く。そして、下流の橋を渡る時、神社の方の風景を見て「きれいだね」と仕事先の方と話したことを記憶している。まさか、そこにある神社と繋がるとは。

大阿坂町の阿射加神社本殿も英彦山神宮上宮も、きちんと向き合ってラインに沿ってわずかに傾けて建てられていることが、阿射加神社があえてこの位置に遷座されたことの信憑性を感じる。

この與止日女神社だが、嘉應二年（1170）の記録には、境内に本殿が記されておらず、本来は、川そのもの、あるいは、淵を拝する自然崇拝の神社だったらしい。やはりここも瀬織津姫（大地神・水神）の聖地だったのではないだろうか。海神の娘の豊玉姫とすりかえたのか。あるいは自然系神の豊玉姫も本来は瀬織津姫なのだろうか。淀姫ともよぶが「淀」は、川の流れを淀ませて自然エネルギーを抑える意味になる。波動の高い自然エネルギー（瀬織津姫）を抑えるために、あえて淀姫と呼んだのか。

ちなみに、大和町は律令時代以降の肥前国府があり古代佐賀の中心地だった。この上流部には17基の巨石群を持つ下田山があり、そのうちの一つ造化大明神は與止日女神社のご神体とされているらしい。祭祀線につながりは見つけられなかったが、このあたり全体が縄文時代からの聖地なことは確かのようにだ。阿射加神社や英彦山の神気引き寄せのレイラインなのだろう。

英彦山の神は、天照大神の子の天忍穗耳命（あめのおしほみのみこと）となったが、発祥の玉屋神社の祭神は太陽神の猿田彦神である。修験者たちは英彦山大権現と隠して猿田彦神を信仰していたのかもしれない。阿射加神社（大阿坂町）の猿田彦神、英彦山の猿田彦神、とすれば與止日女神社もやはり夫婦神の瀬織津姫と考えられる。

きっと、瀬織津姫を祀ることを禁止されて別の姫神にして信仰してきたのではないだろうか。ちなみに、豊玉姫の夫は山幸彦。浦島太郎のモデルとされる。父は国津神の大綿津見大神（オオワタツミノカミ・豊玉彦）。

さて、次は大沼の浮嶋稲荷神社の位置で同距離の神社を探してみた。この神社は大沼浮島に役の小角が680年に祀った浮島宮（大沼社）を、730年に少し離れた場所に建て替えられている。なぜかこの時から浮島宮は稲荷神社となってしまった。



■阿蘇神社 528.235km - 阿射加神社（大阿坂町） - 大沼浮嶋稻荷神社528.235km

阿蘇神社

式内社（名神大社1社、小社1社）。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。全国に約450社ある「阿蘇神社」の総本社である。古代からの有力氏族である阿蘇氏が大宮司を務め、現在も末裔である阿蘇治隆が大宮司を務める。

古来、阿蘇山火口をご神体とする火山信仰と融合し、肥後国一の宮として崇敬をあつめてきた。

以下の12柱の神を祀り、阿蘇十二明神と総称される。

一の神殿（左手、いずれも男神）

一宮：健甕龍命（阿蘇都彦命）- 神武天皇の孫。たけいわたつのみこと。

三宮：國龍神（吉見神・彦八井神）- 二宮の父、神武天皇の子。くにたつのかみ。

五宮：彦御子神（阿蘇惟人）- 一宮の孫。阿蘇大宮司家につながる。ひこみこのかみ。

七宮：新彦神 - 三宮の子。にいひこのかみ。

九宮：若彦神 - 七宮の子。阿蘇神社社家につながる。わかひこのかみ。

二の神殿（右手、いずれも女神）

二宮：阿蘇都比咩命 - 一宮の妃。三宮の娘。あそつひめのみこと。

四宮：比咩御子神 - 三宮の妃。ひめみこのかみ。

六宮：若比咩神 - 五宮の妃。わかひめのかみ。

八宮：新比咩神 - 七宮の娘。にいひめのかみ。

十宮：彌比咩神 - 七宮の妃。やひめのかみ。

諸神殿（最奥、いずれも男神）

十一宮：速瓶玉神（國造神）- 一宮の子。国造本紀によれば、初代阿蘇国造に任命された。はやみかたまのみこと。

十二宮：金凝神

孝靈天皇（第7代）9年6月、健甕龍命の子で、のちに初代阿蘇国造となる速瓶玉命（十一宮）が、両親を祀ったのに始まると伝える。阿蘇神社大宮司を世襲し、この地方の一大勢力となっていた阿蘇氏は、速瓶玉命の子孫と称している。

国史では、「健甕龍命神」および「阿蘇比咩神」に対する神階奉叙の記事が見え、健甕龍命神は天安3年（859年）に正二位勳五等、阿蘇比咩神は貞観17年（875年）に従三位までそれぞれ昇叙された。延長5年（927年）に成立した『延喜式』神名帳では、肥後国阿蘇郡に「健甕龍命神社 名神大」および「阿蘇比咩神社」と記載され、健甕龍命神は名神大社に、阿蘇比咩神は式内小社に列している。

熊本県阿蘇市一の宮町宮地3083-1



●大阿坂町の阿射加神社本殿にコンパスの針を落とし、今度は大沼浮島を神池とする浮嶋稲荷神社の円周ラインを探してみた。すると528.235kmの同距離で熊本県の阿蘇神社の本殿がぴったりぶつかってきた。

肥後国一宮の阿蘇神社は式内社で450社ある阿蘇神社の総本社である。古来、阿蘇山火口をご神体とする火山信仰と融合したとすれば、火は日でもある。おそらく、国津神の猿田彦神とすりかえて新しい神として建立されたのではないか。山は瀬織津姫、火は猿田彦神であれば火山は象徴的な夫婦神となる。ちなみに、肥前国の福岡県那珂川町には日吉神社があるが、滋賀県の日吉大社が勧請したのは、この日吉神社の猿田彦神とされている。（平安時代/藤原家を襲った菅原道真を参照ください）肥前・肥後ともに太陽神猿田彦神の統治する火前・火後の国と考えてしまう。

ただ、元々阿射加神社は山頂にあったとされるが、阿坂山の白米城跡地では同距離にならない。やはり、ここに両神社の神気を集め、ここから山頂に向かって気を送る出雲族の祭祀場だったのだと思う。そのしくみに重ねて、大和族があとから逆に封じるために作ったしくみだを考える。

小阿坂町の阿射加神社は行基が創建したとも伝わる。大沼社が稲荷神社になったのも行基が活躍していた頃。とすれば、こちらの阿射加神社も、行基が古いしくみを流用したのではないだろうか。

では、もう一つの小阿坂町の阿射加神社を調べていきます。

第2章 小阿坂町の阿射加神社



■英彦山権現 塞の神岩座 528.258km - 阿射加神社 (小阿坂町) - 豊龍神社 528.258km

小阿坂町の阿射加神社

神代の昔我が伊勢の国をお治めになってゐたのは猿田彦の大神でありました。此の猿田彦の大神が御かくれになったのが阿邪訶（アザカ）の海であります。阿邪訶は阿射加又は浅香とも書き、後世は専ら阿坂の字を用いてゐます。

ところでここに一つの疑問は阿邪訶の海と云ふことであります。人も知る如く今日の松阪市小阿坂町は、伊勢湾の海岸からそ凡二里を距る山寄りになります。太古に阿邪訶と申したのはずっと広い地域を籠めて申した者で、大たい一志郡東部の平坦地の総称であつたと思われ、具の阿邪訶の親村が今日の阿坂であつたと考へられるのであります。阿坂と云ふところは伊勢の国の内で最も古い歴史を有つたところで、既に神代の昔から知られていました。恐らく日本の内でも最も早く開けたところでありませう。而して我が伊勢の国の内何処が一番肥沃であるかと申し燃すと、それは一国の胴部にあたる一志郡の平野、即ち古への阿邪訶の地であります。猿田彦の大神は恐らく此の阿邪訶を中心として伊勢の国を統治なさつてゐたものと思ひます。

松阪市小阿坂町には阿射加神社と申す古い神社今も昔ながらに御鎮座になって居ますが、此の阿射加神社こそは猿田彦の大神を齋き祀るところの神社であるのであります。古代伊勢の中心である小阿坂町に伊勢の国つ神出あられた猿田彦の大神を奉祀するところの阿射加神社が鎮まり坐すことは、極めて古い御歴史と、最も深い御由緒とによらなければなりません。（中略）阿射加神社は猿田彦の大神を、お祀りする神社の中で最も由緒ある神社であります。この猿田彦の大神御事蹟にも明らかなように、道案内の神、つまり地鎮の神であると共に交通安全の神として敬い奉られるわけでありませう。

小阿坂町阿射加神社



本居宣長の『古事記伝』には、円座薬師という小阿坂にあった寺の縁起に、当神社は行基が勧請したとの伝えがあつたことを記している。

三重県松阪市小阿坂町120

豊龍神社

承和11年（844）に延暦寺の僧安慧（あんえ・円仁の弟子）が奥州を巡り歩いて、講場をその地に開いた時、龍の神霊を祀って東五百川の鎮守として、別当「東守寺」を建立したと記されている。さらに慶長年間（1596～1615）に寒河江肥前の守が社殿を再建し、明治維新の廃仏毀釈によって豊龍神社となり、東守寺住職は復職して豊嶋氏を称したとする。

明和年間（1764～72）に左沢在住の松山藩医であった羽柴玄倫が誌した『宗古録』には、安慧がこの地に天台の教えを広める決意をしたとき「瑞巖美麗の姫大神」があらわれ「我こそ海童神（わだつみのかみ）の娘なり」と名のり「汝の護法善神とならん」と誓ってくれたのが豊玉姫大神であるという。

さらに、安慧みずから大般若経600巻を書写して筐（はこ）に納め、この山上に埋めたと述べ、山号を「宝経といい或は宝筐と作る」と書いている。

山形県西村山郡朝日町宮宿



●小阿坂町の阿射加神社にコンパスの針を落として大沼浮島で円周ラインを探しても何も見つからなかったのも、もしかしたら別の神社かも知れないと考えた。大沼浮島のある朝日町には平安時代の神社が4つもある。その中で町の中心地宮宿にある豊龍神社がヒットした。驚いたのは、やはり英彦山権現の塞の神岩座が528.258kmで同距離だった。豊龍神社は平安京大極殿が大沼浮島の気をひくために同距離に置いた重要な神社である。

そして、忘れていたが與止日女神社のある佐賀市大和町の妙見神社と左翼の同距離になり護っているしくみだった。すでに大和町と繋がりがあったことに驚かされた。

■ 妙見神社 536.79km ---平安京大極殿 ---- 豊龍神社（山形県朝日町） 536.79km
■ " 大沼浮島（出島・山形県朝日町）536.79km

詳しくはカテゴリーの平安時代から「平安京を護る朝日町の神々」をご覧ください。

祭神は山形ではめずらしい豊玉姫大神。奇しくも與止日女神社と同じ祭神である。豊玉姫は出産の際に八尋和邇（ヤヒロワニ・海の怪物）になったが、豊龍神社は竜の神霊を祀ったとされている。龍も海の怪物か。豊龍神社は天台系だが竜族は国津神の出雲系。とすれば、小阿坂町の阿射加神社も、左翼に塞の神岩座の瀬織津姫、右翼に豊龍神社の瀬織津姫に守られているしくみと考えられる。



さて、地図上に阿射加神社から塞の神に線を弾いてみてさらに驚いた。ぴったり「玉屋神社」を通っている。玉屋神社は英彦山信仰の発祥地。

ならば「このラインも與止日女神社に繋がってたりして」と、まさかの気持ちで線を伸ばしてみた。すると、やはり見事にぶつかってしまった。鳥肌の連続である。



■ 《レイライン》 與止日女神社 - 英彦山権現 塞の神 - 玉屋神社 - 阿射加神社 (小阿坂町)

玉屋神社 (玉屋窟)

英彦山の古い記録「彦山流記」では彦山の始まりは、玉屋窟であるといわれています。彦山の開祖はこの窟で修行した、恒雄という人だったのです。恒雄は、この窟でながいあいだ一心不乱に修行を積んで、如意の宝珠（世の中の人々を救うためにたいへん役立つ不思議な力を持つ珠）を授かりました。その珠は窟の奥から小さな倶梨伽羅（竜）が口にくわえて細い水の流れにのって現れたのです。珠が出現したことから、それまで般若窟と呼んでいましたがそれを改めて、玉屋窟と呼ばれるようになりました。

英彦山には修行のための窟が49カ所あったということで、いままでの調査では48カ所まで推定できています。まだあと1ヶ所だけ分かっていません。

御祭神：猿田彦大神

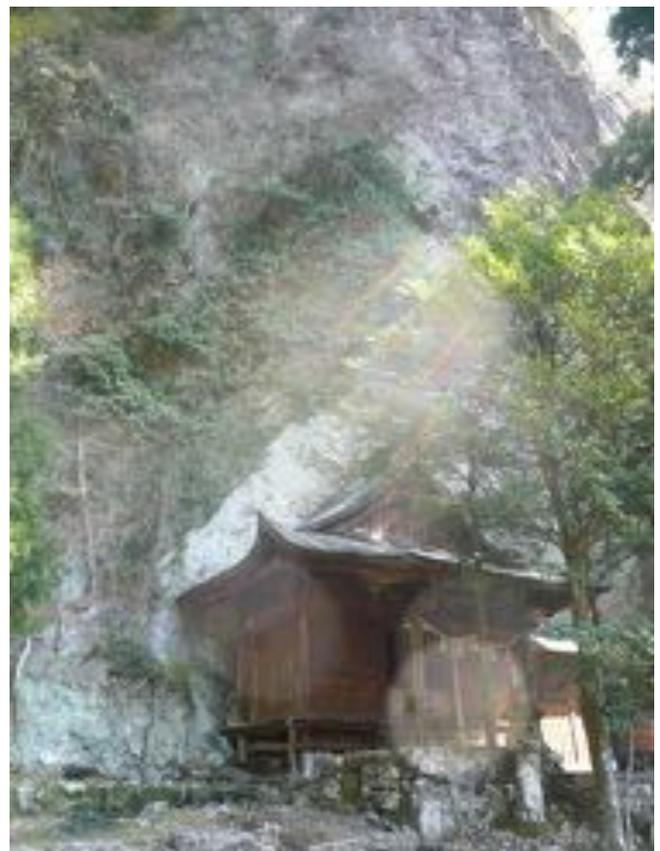
祭礼日：旧暦6月3日・御池さらえ

境内社：鬼神社

●玉屋神社は英彦山始まりの聖地なのに、至る参道は川に流されたまま、整備もされていない。至る道路も駐車場も狭い。ネットで調べられる情報もとても少ない。なんだか、表に出すことを嫌っているような雰囲気を感じた。ただ、現地はとても爽やかな気が流れて気持ちいい場所だった。そびえ立つ岩座にも圧倒され瀨織津姫の神聖な場所に感じた。滝の坊塞の神岩座と同じで、岩座自体は瀨織津姫だから夫神の猿田彦神を祀って夫婦神を表していると考えられる。

写真には、やはり無数のオーブと美しい虹色の光線が写り込んでいた。猿田彦神と瀨織津姫が優しく出迎えてくれたように感じた。

小阿坂町の阿射加神社も、左翼に與止日女神社の瀨織津姫（豊玉姫）、英彦山権現塞の神岩座の瀨織津姫、そして玉屋神社の瀨織津姫、右翼には豊龍



神社の瀬織津姫（豊玉姫）と、5人の瀬織津姫に守られる形で遷座されていると考えたい。

●「日子山」が「彦山」に、そして「英彦山」になったとされるが、誰が考えても玉屋窟に祀られた太陽神の子、すなわち申田日子神（猿田彦神）のことだと思える。しかし、大和族にとって太陽神は天照大神だけでいいので、彦にかえさせられ、さらに分かりづらいうちに英彦に変えられたのだろう。そして「日女」は「日子」の妻のこと。すなわち瀬織津姫。この夫婦神を信仰する出雲族や蝦夷がやぶれて、日子山や全国の自然聖地で申田日子神と瀬織津日女の夫婦神は隠されてしまったのだと思う。

山岳修験者は、特に空海の真言密教系は出雲族系と考えて、猿田彦神と瀬織津姫信仰を大日如来や不動明王として隠して広げていたのではないかと考える。しかし、空海も山伏たちも山から鉱物を採掘する鉱山師でもあった。山の胎内から自然波動のもととなる鉱物を取り出し、森林を伐採し、水銀の鉱毒を流して下流域を汚染した。水銀が最も自然波動を消す物質と聞いたことがある。アニメもののけ姫のデイダラボッチは水銀と考える。出雲族なのに瀬織津姫の自然波動（エネルギー）を抑えるような活動をなぜしていたのか混乱してしまう。あるいは天台系の修験者の仕業だろうか。

実は戦後までうちの家系は不動明王の力を借りて病気を治し、占いをする呪い師をやっていた。不動明王信仰は龍神信仰でもあるから、龍の子である蛇はもちろん殺してはいけなかったし、ドジョウやウナギも祖父の代までは食べていなかったと聞く。私自身、以前にバセドウ病になり左右の眼の大きさを違えて不動明王と同じ顔になり、不動明王を学びこの歴史にはまった。

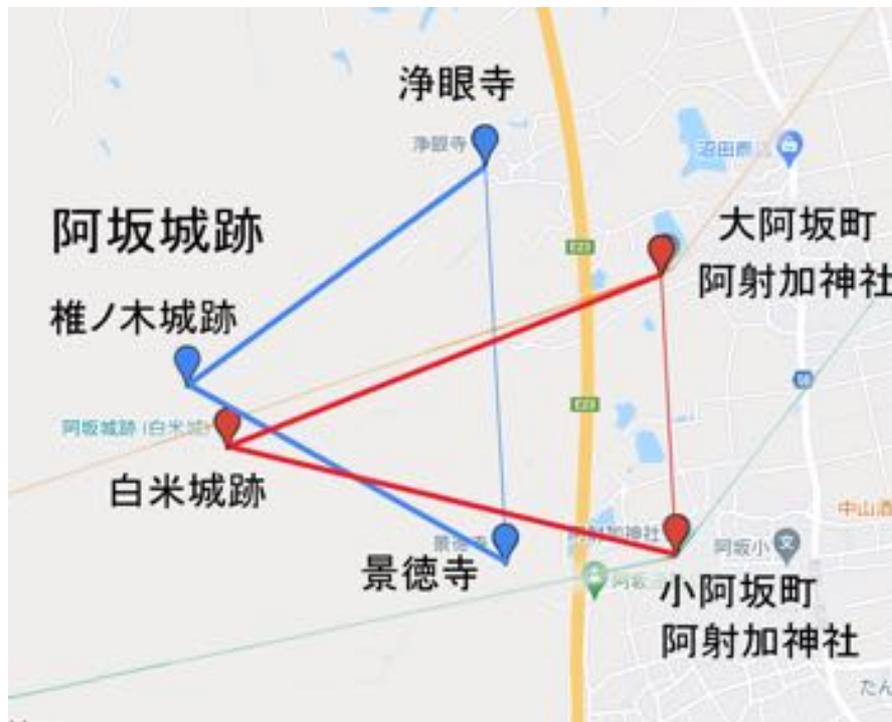
山形県は出羽三山の羽黒修験が英彦山修験とともに日本三大修験とされている。しかし、鎌倉時代までは、すぐ隣の朝日岳・大沼浮島の「朝日嶽修験」も隆盛を誇っていたらしい。執権北条時頼が「朝日嶽修験」を宗教活動千年封じし、朝日岳から修験者は消えた。大沼浮島は出羽三山修験に組みされる形となったらしい。同時期に北条時頼の松島の天台宗追放は有名である。もちろん奈良・京都を護ってきた祭祀線を壊すことが目的だろう。

稻荷神社の鳥居の赤は丹生（水銀）とされる。大和族系の浮島稻荷神社を拠点とする朝日嶽修験も天台系で自然波動を伏す（抑える）役割だったのだろうか。北条家は出雲系だろうか。おかげで大朝日岳から大日靈貴命（オオヒルメムチノミコト/天照大神）は降ろされ800年以上経つ。朝日連峰は以来エセ神のいない日本一原生自然が広く自然波動の高い山となったと考えられる。

天照大神の子を祀る英彦山修験と天照大神を祀っていた朝日嶽修験が両極で活動していたのは、原日本の神「猿田彦神」を封じるためだったのではないか。初めは出雲族が猿田彦神を守るために作ったしくみが、のちの為政者によって封じるしくみに変えられていったのではないか。朝日嶽修験がなくなった後は隣の羽黒修験がその役割を担っていたのかもしれない。



第3章 阿坂山頂の旧阿射加神社跡はどこ？ 猿田彦神はどこに眠っている？



■ 阿射加神社（大阿坂町）1.370km - 阿坂城白米城跡 - 阿射加神社（小阿坂町）1.355km
(誤差 15 m)

阿坂山 阿射加神社 阿坂城

標高300m余の山頂に築かれた山城で、南北300m、東西150mの範囲に及ぶ。南北2つの郭からなり、北郭を椎ノ木城、南郭を白米城とも呼び、台状地を中心に堀切り、土塁等が配されている。北郭の方が、規模が大きく新しく、堀切や土塁などで複雑に構成されていることから、北郭の椎ノ木城が主郭であると考えられる。

阿坂城は、文和元年（1352）の南北朝の争乱を伝える資料に初めて登場するが、もっともよく知られるのは応永22年（1415）に北畠満雅が足利幕府軍を迎え撃った戦いである。籠城する満雅は、馬の背に白米を流して水があるように見せて、水断ち作戦に出た幕府軍を欺き撃退したと『南方紀伝』（江戸時代初めに成立）は伝える。その後、永禄12年（1569）、大河内城に拠る北畠具教を攻略するため、織田信長は大軍を發し、先ず北畠の重臣大宮氏の守る阿坂城を落し廢城に至らしめた。





●いよいよ、阿射加神社の元の位置が知りたくなり、阿坂山にコンパスを置いてみた。猿田彦神はどこに眠っているのか。もしかしたら封じられているのかもしれない。

まず。山頂からの遷座について整理すると、

大阿坂町の阿射加神社では、安岡親毅の『勢陽五鈴遺響』には、応永以後に阿坂山頂から遷座したと記し、社伝によれば、織田信長が、城主として阿坂山山頂の阿坂城を守っていた北畠家の重臣大宮入道含忍斎を攻略する際の兵火に罹り、社殿と古記録の全てを焼失し、北畠氏滅亡の後に再建されたとはいえ管理する者もいなかったが、元禄3年（1690年）に奥村要人という社人が現れたと伝える。

小阿坂町の阿射加神社では、社伝に、永禄年間（1558-70年）に兵火に罹るのを怖れて阿坂山山上から遷座したと伝えるが、藤堂元甫の『三国地志』では、応仁の乱（1467-77年）の時に北畠氏によって現在地に遷座された、と説いている。また、その創祀について『古事記伝』には、円座薬師という小阿坂にあった寺の縁起に、当神社は行基が勧請したとの伝えがあったことを記している。

さっそく、一目で二等辺三角形が予想されていた白米城跡の石碑に針を置いて両阿射加神社と同距離が確かめてみた。すると境内には余裕で合致したが本殿どうしでは15mの誤差があった。ピンポイントではなくて残念に思えたが、すぐになるほどと思える出来事があったことを思い出した。実は現地調査した時に波動を感じられる女性二人に同行してもらったのだ。彼女たちは波動の高い場所や御神木に近づくとビリビリと手のひらや体がしびれ出す。大阿坂町の阿射加神社を訪ねた時は、本殿よりもその裏からビリヒリが伝わって来ると言っていたのだ。エネルギーが湧き出しているスポットは本殿より奥に

ある社叢の森の中にあるということ。きっと 15m の誤差はそのことだろう。伊雑宮（瀬織津姫）のように岩座がそこに鎮座しているのかもしれない。

ということは、白米城跡の石碑付近に本来の阿射加神社があったことは確かだろうと思う。しかし、その位置では大沼浮島にも阿蘇神社にも英彦山にもつながらなくなってしまふ。小阿坂町の阿射加神社は行基が開いたとも伝わるので、やはり、二つとも里宮もしくは遥拝所、祭祀場として古くから存在していたのではないだろうか。左右に二つあって、山門に置かれた阿吽の狛犬や仁王像と同じ力を持つのではないか。阿射加神社の由来は、織田信長の兵火に罹り、社殿と古記録の全てを焼失しているのだから真実は誰にもわからない。

前から気になっていたことがある。それは「2 つある」ということ。里に阿射加神社が二つ、そしてこの阿坂山には二つの山頂があるのだ。もう一つの山頂に本丸の椎ノ木城があったとされる。

さっそく、椎ノ木城跡のチェックマークに針を合わせて、周辺の神社仏閣を探してみた。すると…



■浄眼寺 1.075km - 阿坂城 椎ノ木城跡 - 景德寺 1.075km

浄眼寺

浄眼寺は阿坂城跡の麓に位置する曹洞宗の古刹で、伊勢国司北畠政勝（政郷）が僧大空玄虎(たいくうげんこ)を招いて開いた寺院である。

北畠政勝は文明18年(1486)、入道して無外逸方(むがいっぼう)と号し、当寺を自身の菩提所とした。このため、次代の北畠具方(材親)以降、晴具・具教・具房の歴代国司から発給された住持職等を安堵する文書が、数多く残されているほか、開基の無外逸方像が伝来する。明応3年(1494)の年紀を持つ無外逸方像は彼の存命中に描かれたもので、戦国武将の寿像(じゅぞう)としても、また北畠氏の当主を描いたものとしても貴重な作品である。

なお、本堂と重層の禅堂及び総門は、宝暦年間(1751~64)の再興である。
三重県松阪市大阿坂町 1180 番地

景德寺

小阿坂町の阿射加神社の奥の院としていた伝えがある。
三重県松阪市小阿坂町 2936

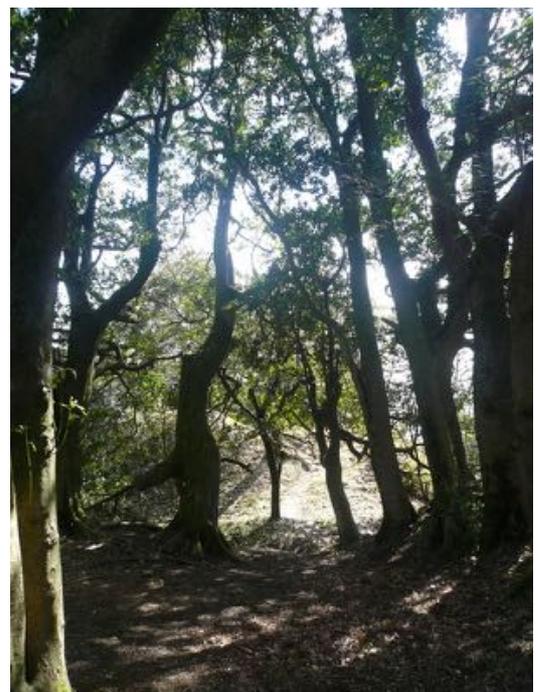
●簡単に見つかった。

阿坂山に登る時に車をとめたのが浄眼寺の駐車場だったので、そこに円周ラインを置いてみた。登り口のお寺だから、きっと関係あるだろうと考えた。円周ラインをたどっていくと小阿坂町の景德寺にピンポイントでぶつかった。

浄眼寺は伊勢国司の武将北畠政勝が建立している。もう一つの阿射加神社は浄眼寺にあったのではないかとする考え方もあるらしい。景德寺については、検索してもなにも見つからないが、小阿坂町の阿射加神社の奥の院だと伝わっている。それにその阿射加神社は行基が建立したとも伝わるので歴史はずっと古そうだとすれば、こちらも二つの阿射加神社に守られたしくみといえる。もちろん阿坂城本丸の椎ノ木城を守るしくみといえる。

実際に登ってみた時に、椎ノ木城跡に波動の高そうな木が幾本も立っている場所がとても神聖な場所に感じた。ここに猿田彦は眠っているのだろうか。白米城の石碑の場所は猿女君(瀬織津姫)だから、岩座に猿田彦神を祀るように、夫神の猿田彦神をそこにつながるように里に祀ったのではないかと。

さて、もし、ここに猿田彦神が眠っているのなら、出雲族の首長を封じるための武神を頂天にしたピラミダルな三角祭祀線があるはず。地図を広げて眺めていると、すぐに熱田神宮が気になった。猿田彦神を封じるなら三種の神器の草薙神剣(くさなぎのみつるぎ・天照大神)が最もふさわしいだろう。熱田神宮は諏訪湖も封じている。最高の武神といえる。さっそく、コンパスの針を置いてみた。すると…





■ 椎ノ木城跡 72.415km - 熱田神宮 - 女河八幡宮 72.415km

熱田神宮

主祭神

熱田大神（あつたのおおかみ）

三種の神器の1つ・草薙神劍（くさなぎのみつるぎ、草薙劍・天叢雲劍とも）を神体とする天照大神を指すとしている。

相殿神

天照大神（あまてらすおおかみ）

素盞鳴尊（すさのおのみこと）

日本武尊（やまとたけるのみこと）

宮簀媛命（みやすひめのみこと）

建稲種命（たけいなだねのみこと）

主祭神である熱田大神について、熱田神宮は「三種の神器のひとつである草薙神劍を御霊代としてよらせる天照大神」とする。すなわち、草薙神劍の「正体」としての天照大神をいい、いい換えれば、草薙神劍そのものが天照大神の「霊代（実体）」としての「熱田大神」である。戦前までは、主祭神を「草薙大御劍神」（『熱田神宮略記』（1877年（明治10年）））、「天璽草薙大御劍（あまつみしるしくさなぎのおほみつるぎ）」（『熱田神宮略記』（1939年（昭和14年）））などとしながら表現上における正体と霊代の区別がなされていなかった。ただし、草薙神劍を天照大神とする捉えかたそのものは『熱田明神講式』（平安時代末期）にすでに現れる古いものである。しかし、より古い『尾張国風土記』逸文には、日本武尊が宮簀媛に草薙神劍を手渡す際に自らの形影（みかげ）とするようにと語り残したとあり、奈良時代には日本武尊を草薙神劍の正体とする見かたがあったともいわれる。平安時代以降は、伊勢の皇大神宮（内宮）の祭神である天照大御神を草薙神劍の正体とすることが通説であり、このことで伊勢と熱田は「一体分身の神」を祀る神社であり、日本国を支える2柱であるとさえされてきたのである。

名古屋市熱田区神宮 1-1-1

女河八幡宮

御祭神：品陀和氣命（応神天皇）、比賣大神（玉依比賣命）、息長帯姫命（神功皇后）

例祭日：10月第二土曜・日曜日

神事：巫女の占い 十列児 流鏝馬 神的 神楽 的場定め 種まき 相撲

社伝：斉明天皇元年（655）の鎮座と称せられますが、明和元年（1764）社殿の焼失により記録を失いその由来を詳にしません。一説によれば**往昔岡崎富の谷に鎮座していましたが、何時の時代にか現在地に遷座した**と伝えられています。慶安元年（1648）徳川家光公により朱印83石を下賜されました。

湖西市に数ある神社の中で、女河八幡宮ほど特殊な神事が多く残り、また、これに奉仕する宮座のかたち比較的残されている神社は珍しいです。

静岡県湖西市新所 1

●やはり見つかった。典型的なピラミダル三角祭祀線。この祭祀線は、封じるしくみと考える。ほぼ頂角が90度、底角が45度の二等辺三角形。頂角に大和族系の武神神社、底角に出雲系の神社が置かれる。ただし、どちらかの底角に大和族の武神、もしくは支配された出雲系の神を置く形もある。

この三角形は、頂角の支配神に熱田神宮の草薙神劍（天照大神）、右底角に大和族の八幡武神 品陀和氣命（応神天皇）。そして押さえつけられている左底角に、出雲族の猿田彦神が眠る椎ノ木城跡。女河八幡宮には特殊な神事が数多く残されているらしい。このしくみを作るために遷座されたのだろう。

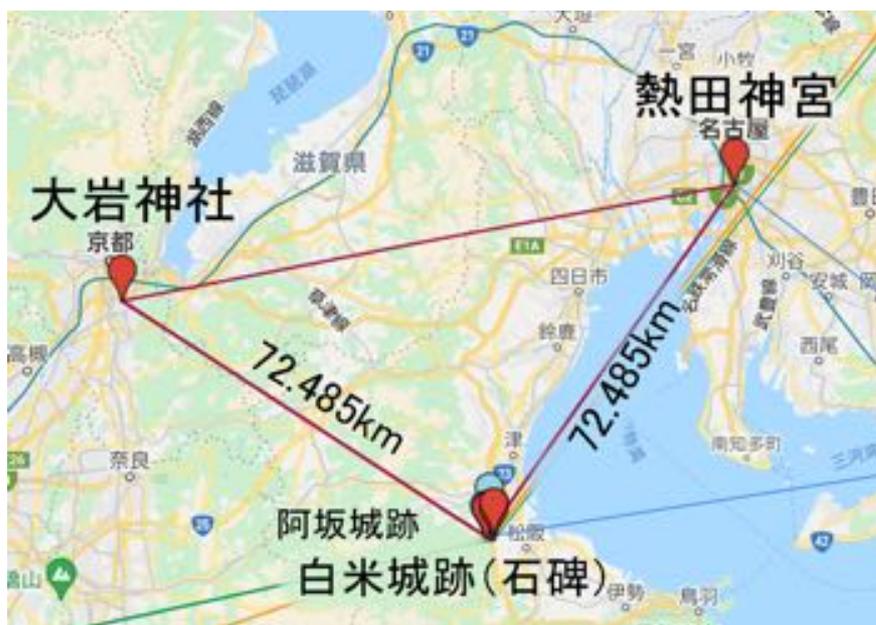
熱田神宮に針を置き、今度は南稜の白米城の石碑の円周ラインも探したが、どこの神仏にもぶつからなかった。



原日本の神、猿田彦神（饒速日命）は、熱田神宮の草薙神剣の天照大神やスサノオウ、ヤマトタケル、そして女河八幡宮の品陀和氣命によって封じられている。ただ、単純に織田信長が北畠氏を攻略する時に施した布陣なのかもしれない。信長が熱田大神を尊崇し桶狭間の戦いでは必勝祈願をしている。

実は偶然にも、来月、女河八幡宮の湖西市の隣、豊橋市の方に仕事で招かれている。またも鳥肌的なシンクロである。まさに呼ばれているような気がしてならない。

さて、試しに椎ノ木城跡を頂角にして、熱田神宮を底角にしても調べてみた。しかし、神社仏閣とはぶつからなかった。最後に、白米城跡を頂角にしたら、ちょっと面白い真逆のピラミダル三角形が見つかった。



■大岩神社 72.485m – 阿坂城跡（白米城・石碑） - 熱田神宮 72.485km

大岩神社

伏見稲荷大社で有名な稲荷山から南に大岩山（標高 182m）があり、山頂に大岩神社と小岩神社が鎮座する（世間的には大岩神社で総称されることが多い）。

その名のとおり、大岩神社は「大岩」をまつり、小岩神社は「小岩」をまつる神社で、大岩・小岩のそれぞれを玉垣で囲って、手前に別々の拝殿を設置している。当然ながら大岩は小岩よりも大きく、とはいっても、大岩は高さ 1.5m、幅 2m ほどであり一大巨岩というわけではない。

小岩に関しては、高さ 1m 弱、幅 1m ほどの大きさとなっている。

京都新聞の記事「岩石と語らう」95（1999.4.6）では、この二体の岩は人が据え付けたものではなく山の露岩であると説明しているが、地中の岩盤からは独立して置かれているような印象も受ける。周辺の地表面に岩盤の露出がゼロというわけではないが、目立ってもない。だからこそ大岩・小岩が相対的に隆起しており特別視されたのだろうか。古態はどうだっただろう。

この神社の歴史は、江戸末期の山火事で古記録類が焼失したというが、唯一、大岩・小岩についての言い伝えが残っている。

当時、聞き取り取材をおこなった前掲の京都新聞の記事によれば、「男女二人の神が、それぞれが重い病気にかかった際に、互いの献身的な看病によって病を治したことから、土地の者がその徳をたたえて神社を造り、『大岩』を男の神、『小岩』を女の神としてまつったという」と。

私が 2004 年に訪れた時も、大岩と子岩は陰陽の関係にあるのだと、当時、神社を守られていた方から聞いた。

この伝説から、大岩・小岩は心身の病を治癒する霊石として、かつては全国各地から噂を聞きつけ参拝する人達が集ったといわれるが、それも昔の話。

神職の方が亡くなられて以降、後継の方がどうやらおられないようで、最近訪れた方の話を聞くと境内の手入れが追い付いていないらしい。

大岩神社・小岩神社は氏子をもたない神社らしく、一部の篤信者の方の善意の清掃によって守られている状況かもしれず、先行きを心配せずにはいられない。

（巨石、磐座、奇岩、奇石と呼ばれるものの研究 HP より）

京都市伏見区深草向ヶ原町

●あきらかにこの三角祭祀線のしくみは、猿田彦神側すなわち出雲族側のしくみと考える。熱田神宮に封じられていない白米城跡（石碑）を頂天に使い、底角に大岩神社、封じる底角が熱田神宮になるよう配置してある。大岩は大小の陰陽石。それほど大きくないので、同距離に持ち込んだとも考えられる。鏡を祀るのは大和族。石や岩、山を祀るのは出雲族の神社である。「男女二人の神、それぞれが重い病気にかかった際に、互いの献身的な看病によって病を治した」という言い伝えは、まさに猿田彦神と猿女君（瀬織津姫）の夫婦神信仰を表している。太陽神の大日如来（猿田彦神）と水の神（弁才天・瀬織津姫）の合体神の不動明王も祀られている。このしくみは熱田神宮を逆に抑えて阿坂山の猿田彦神を擁護しようとするしくみではないだろうか。現在は宮司も亡くなり、荒れ果てて心霊スポットと揶揄されているらしい。宮司は氏子も持たず、猿田彦神を蘇らせるために古代から代々働いてきたのかもしれない。ぜひ訪ねてみようと思っている。

さて、この二つの三角が合体し



た平行四辺形を見ていると、熱田神宮からのラインが阿坂の手前でクロスしていることもあり、インフィニティー無限大数字の「8」に見えてくる。同じような形はたしか伊勢の内宮下宮にも施されていた。陰陽、破壊と創造、大和族と出雲族。うまくバランスをとっているような気がしてきた。

●なぜ阿坂山に二つのピークがあるのか？

やはり、夫婦神の猿田彦神が椎ノ木城跡に、猿女君（アメノウズメ）が白米城跡のピークに埋葬されているのではないだろうか。



なぜ阿射加神社が二つあるのか？

大阿坂町の阿射加神社は本殿裏の社叢に瀬織津姫（陰）の自然波動の高いスポットが元々あると考えるなら、あるいは、山頂の白米城跡に瀬織津姫が祀られていたとすれば、夫神の猿田彦神（陽）を里に祀って然るべき。

大阿坂町の「大（おお）」の漢字は山形県の大朝日岳（おおあさひだけ）にも使われている。山に付く名前でも「だい」と呼ばずに「おお」と呼ぶのは珍しいらしい。浮島の大沼（おおぬま）も然り。大きいことにたいしての「大」ではなく、国津神大国主の「大」なのではないか。自然波動を感じられる二人の女性も大阿坂町の阿射加神社のほうがだんぜんビリビリ感が大きいと言っていた。

やはり、メインの里の聖地は大阿坂町の阿射加神社の社叢の中。その神気（波動）をやりとりするために小阿坂町の阿射加神社も「あ・うん」の位置に祀り、山頂の瀬織津姫の神気を強めたのではないか。

そしてその目的は、先述の熱田神宮に椎ノ木城ピークの猿田彦神が抑えられているピラミダル三角祭祀線に対し、インフィニティーにするために、白米城ピークの瀬織津姫が熱田神宮を抑えるための三角祭祀線を作動させるための祭祀を里のあうんの阿射加神社から行っていたのではないだろうか。

●最後に、もっとも気になっていることについて。

なぜ阿射加神社は、私のあだ名「竜天太陽」と同じ「龍天大明神」と呼ばれているのだろう。解説には、後に水田耕作における水神信仰と結びついたとされるが、それなら龍神社と呼ぶのが普通だろう。

「天」はどのように使うのか気になり、天の入った熟語を検索してみた。すると、すぐに目に止まった名前があった。それは「弁才天」。仏教の守護神の天部に所属する。ついに目から鱗が落ちた。弁才天には龍がつきものだ。龍は弁才天の眷属神だと思っていたが違う。その龍こそが「龍天」である。すなわち弁才天の夫の猿田彦神である。まさに千と千尋の神隠しの千尋とハクの関係を連想させる。龍がつきものの合体神不動明王から水の神瀬織津姫が隠されて祀られていたように、弁才天においては猿田彦神が隠されて龍として祀られていたのだ。「弁才天」といつもいる龍は夫神の「龍天」すなわち猿田彦神だったのである。

全国で荒ぶる龍を攻略し龍神を祀る神社が多いのは、やはり出雲系国津神の龍一族と大和族抗争を表したものに違いない。

そして私のあだ名「竜天太陽」は太陽神 猿田彦神のことを表していたのだ。

以上、最後まで妄想歴史にお付き合いいただきありがとうございます。私の考えはあくまで妄想ですが、三角祭祀線が実在することは確かです。もっと歴史に精通されている人ならもっと深読みできるでしょう。この報告書は、これからも女河八幡宮や大岩神社などの現地調査をして、気づいたことを加筆、修正してまいります。今後とも、ご注目いただけましたら幸いです。

2021年6月11日



弁才天 画/奥田みき



千と千尋の神隠し

〈追記〉

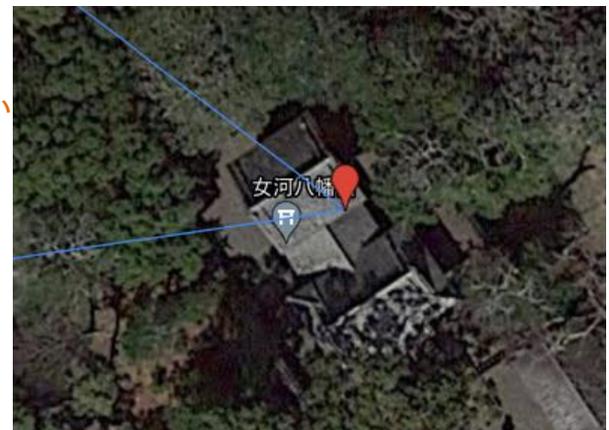
●7月4日 愛知県に仕事で招かれ、念願の女河八幡宮（静岡県湖西市）と大岩神社（京都市伏見区）を訪ねることができた。特殊な仕事をしていることもあるが、昔から重要な神社や聖地の近くに仕事で呼ばれてきた。今回もこの二つの神社の存在を知った一ヶ月後に訪ねることができた。まったく私に憑いてくれている神様がお膳立てをしてくれていることをリアルに感じている。

しかも今回、偶然私を招いてくださった女性は以前に御嶽山の麓の村で仕事をしていた方で、御嶽山信仰のしくみを調べるきっかけをくださった方でもある。

女河八幡宮



●境内に入るなり、ご神木をざわざわと揺らす風が吹いてきた。女河八幡宮の社殿は、海のように広い浜名湖を真正面に向けて建てられていた。海の神様みたいだと思ったが、地図を確認すると社殿は北西向きに傾けて建てられてある。角度は少しずれるが、熱田神宮の天照大神に向けて建てられたのだろう。その本殿の後ろにはたくさんの小さな境内社が祀られていた。



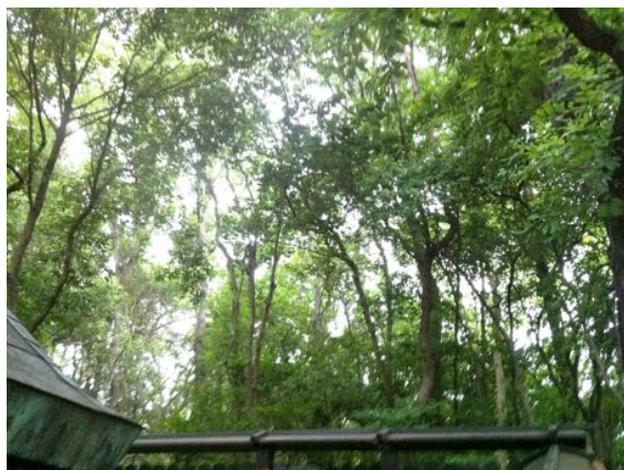
海（汽水湖）に近く女性的な神社に感じたが、祭神は八幡神の品陀和氣命のほかにも、比賣大神、息長帯姫命が祀られている。境内の由緒書きを見て一瞬驚いてしまった。祭神の下にあたかも主祭神のように堂々と比賣大神と書いてあったからだ。よく見たら品陀和氣命は右隣に書かれていた。隣の「神事」のように、「祭神」は右端の品陀和氣命の上に書くところを真ん中に書いてしまったのだろうか。



しかし、この八幡宮の名前は「女河」である。そして比賣（ひめ）大神とは玉依比賣命のこと。玉依姫は海神（わだつみの神・国津神）の娘。天照大神の子孫 山幸彦の息子と結婚し神武天皇を生んだ。神武天皇は饒速日命や長髓彦が統治する大和を制圧し初代の天皇となった。玉依姫は、このしくみに登場する佐賀市大和の與止日女神社や山形県朝日町の豊龍神社の祭神豊玉姫の妹でもある。もしかしたら元々は玉依姫神社だったのではないだろうか。比賣大神の字が威光を放っているように感じた。

ちなみに、息長帯姫命とは品陀和氣命（応神天皇）を妊娠したまま朝鮮出兵して新羅を制圧した神功皇后のこと。この親子は武神の象徴といえる。この配置のようにこの親子を左右の脇侍にした最強の戦いの神社だと思った。熱田神宮の天照大神とともに阿坂山に眠る猿田彦神（饒速日命）を抑えているのだろう。

大岩神社



京都伏見稲荷近くのホテルに前日入りしたが、さすがに陽の落ちる頃に訪ねたくなかった。翌日名古屋発の飛行機が11時だったので、早朝6時にタクシーを予約した。優しい運転手さんで30分位なら待つてくださるとのことので急いで参道を登った。

神社に着くとやはりざわざわと木々を揺らす風が吹いてきた。いつもそうだが、風は木の上の方で揺れていて私自身は風を感じない。神社や社務所はたしかに朽ち始め、たくさんの石灯籠は倒れ、木々に覆われているので朝でも薄暗い。夕方に来れば心霊スポットに思うのも無理はないと思った。ただ、思ったより爽やかでほっとした。

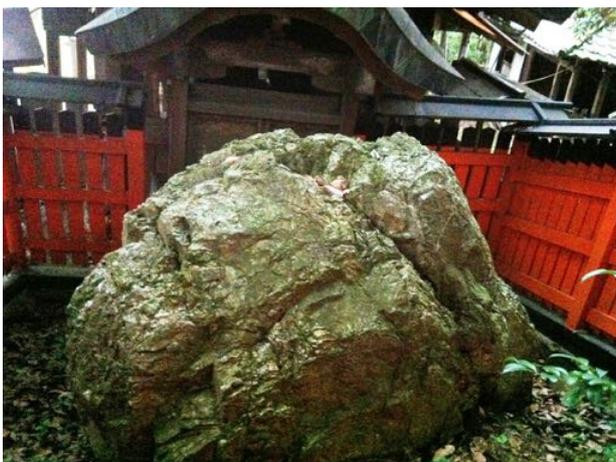
大岩、小岩それぞれに社殿があり、その後ろに岩が祀られていた。



大岩



小岩



大岩は後ろから見られた



社殿後ろ

大岩の社殿では、少し前まで宮司が祝詞をあげていたような雰囲気を感じた。阿坂山に眠る猿田彦神を守るために、出雲の末裔たちはここから熱田の天照大神の神威を抑えていたのだろうか。この神社はきっとこのまま朽ち果て自然に還るが、岩だけはいつまでも残り猿田彦神を守っていくのだろうと思った。なんとなく後ろ髪を引かれる気がしたが、運転手さんが待っているのので後にした。



京都駅まで送ってもらい新幹線に乗り名古屋に着いたのがまだ8時前。もしかしたら熱田神宮に行けるかもしれないと思いたち地下鉄に乗り換えた。20分後には熱田神宮本殿に参拝できた。10年ぶりに訪れたが砂利の長い参道には両脇に石畳が敷かれキャリアケースを転がすことができた。前回は抱えて歩き大汗をかいた記憶がある。



巨大な拝殿の前に立ち、私が最もいぶかしく思ってきた天照大神に、長い旅の終わりを感謝して報告した。

縄文出雲族の太陽神 猿田彦大神のエネルギーのかけらを持つ者として。

私の名前は竜天太陽。

令和3年9月27日追記